

やはり俺の番外編はまちがっている。

T・A・P

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

一話完結の短編集をまとめました

『雪物語』 もしも、俺ガイル世界に物語シリーズが発売されていたら

目次

雪物語

比企谷八幡の放課後、猫まみれ

|

10

|

1

雪物語

その日、比企谷八幡は文庫ではなく赤一色の書籍を読んでいた例によって、由比ヶ浜は用事があるため奉仕部にはいなかった

比企谷八幡と雪ノ下雪乃は静かに読書をしていたが、雪ノ下雪乃はその赤一色の書籍が気になるらしくたまに比企谷八幡の方をチラチラと見ていた

「……………」

「……………」 チラ

「……………」

「…」 チラッ

「……………」

「……………」 チラチラ

「……………雪ノ下、何か用か？」

「比企谷君、私があなたに用なんてあるはずがないでしょ」

「そうかい、そりゃ悪かったな」

「そうよ」

「……………」

「……………」チララ

「やっぱなんかあるだろ」

「なに、比企谷君。私があなたの方をチラチラ見ているわけがないでしょ」

「おい、まだ何も言ってるねえよ。お前、アレか、墓穴を掘るタイプか」

「……………」

「おい、その『あ、しまった!!』って顔やめろ。逆に俺の方が恥ずかしい」

「ところで、比企谷君。その本はなんなのかしら、見た事の無い本なのだけでも」

「流しやがったな。あくこれか、これは……………これには呪文が書かれていてな、唱えると今俺の家にいる魔界の子供が呪文にそった技を……………」

「比企谷君」

「はい、すみません。はい、ごめんなさい」

「真面目に答えてくれるかしら」

「言うより見せた方が早いだろ、ほれ」

比企谷八幡は立ちあがり雪ノ下雪乃に近づいて、本を渡そうとした

「……………おい、受け取れよ」

「あなたから受け取って大丈夫かしら」

「なんもねえよ！」

「それは私が決める事よ」

「さっさと受け取れ」

雪ノ下雪乃はようやく本を受け取り、本のタイトルを確認した

「化物語？」

「ああ、ちよつと前にアニメ化したから久しぶりに読みたくなつたんだよ」

「比企谷君、こんなたくさんの文字を読めるの？」

「おい、驚くところそこかよ。つたく、まあいい。一度読んでみるよ、かなりおもしろいぜ。なんなら貸すぞ」

「いえ、あなたから借りる物なんて何もないわ」

「お前は俺の事を罵倒しないで喋れないのかよ！ほんと、ガハラさんにそっくりだよ」

「が、がは……えつと、それは誰の事かしら？」

「ああ、それに出てくるヒロインの名前だ」

「それが私にそっくりなの？」

「それは読んでみりゃわかる。俺に借りないんならさっさと返せ、タイトルは分かつたんだから書店に行けば簡単に見つかるぞ」

「……いえ、せっかくだから借りることにするわ」

「素直にそう言えよ」

「これが上巻って事は、下巻もしくは中巻あるのかしら」

「…スルーが一番ダメージでかいな。ああ、上下巻だ。ちようど下巻も持ってきたから一緒に持って行け」

「そう、ありがたく借りる事にするわ。感謝しなさい」

「なんでだよ!!」

数日後、奉仕部にて

「比企谷君、コスプレをしなさい」

「……雪ノ下、何言ってるの？てか、押し付けんなよ。なんだこれ……この制服」

「由比ヶ浜さんもこれに着替えて」

「え、ちよ、ゆきののんどうしたの!」

「ほら二人とも渡した制服に着替えて」

雪ノ下雪乃は大きな鞆の中から三着の制服を取り出して二着は奉仕部の二人に押し付け、残りの一着を持っていた

「比企谷君は廊下で着替えなさい。そして、良いと言うまで部屋に入る事を禁ずるわ。もし、入ってきたら……」

「ひゃ、ひゃい。わかりました」

「よろしい。由比ヶ浜さんは小物が色々あるから私が手伝うわ」

「ゆ、ゆきのん。こわい、よ?」

「さあ、比企谷君外に出ていってちょうだい。由比ヶ浜さんを脱がせられないわ」

「ぬ、脱がすって!」

「さあ、由比ヶ浜さん。着替えましょうね」

「ひ、ヒツキー助け……」

「由比ヶ浜さん誰もあなたを助けられないわ、あなたが勝手に一人で助かるだけなのよ」

「ゆ、ゆきのんが壊れた……!!」

「こりゃ、ドハマりしやがったな」

制服をよく見るとタグなどがなく既製品じゃなく、どうやら手作りのようだった。雪ノ下雪乃はこの数日で原作からアニメまですべて網羅した後、続巻まで読みこみこの制服を作っていたようだ

「どんだけハマったんだよ、雪ノ下は。まあ、着替えるか」

「比企谷君、入ってきていいわよ」

「へいへい、待ちくたびれたぞ」

「比企谷君、似合っているわね。ちゃんと髪型もセットしているようだし」

「ひ、ヒツキー、どう？」

比企谷八幡の目の前には、ホツチキスとカッターで武装している雪ノ下雪乃と三つ編みネコミミ眼鏡委員長の由比ヶ浜結衣が居た

「……おい、雪ノ下。こいつに羽川とか無理だろ、キャラ的に」

「ええ、さすがの私もそればかりはどうにもできないわ」

「お前はお前で違和感がないんだが。てか、そのホツチキスとカッターを俺に向けてるな」

「阿良……比企谷君そこは俺ではなく、僕と言いなさい」

「俺の名前を間違えるな！」

「失礼、嘸みました」

「違うわざとだ！」

「かみましね」

「わざとだ！」

「もう！ヒツキー！私のこの衣装、似合ってるかどうか聞いたんだけど！」

「いや、由比ヶ浜。それ、お前がやってる意味無いだろ。ほとんどウィッグと眼鏡でお前

の要素隠れているし」

「……………やっぱり？」

由比ヶ浜はネコミミのついた黒髪三つ編みのウィッグをかぶりそれから眼鏡をかけていた。雪ノ下雪乃のように自然な物じやなく、比企谷八幡が持っている自前のアホ毛的な物も無く、どこか着られているような感じだった

「ん〜でも、こうやって今までやった事がない髪型も新鮮だよな」

由比ヶ浜はあまりそう言う格好をしてこなかったのか、くるくる回ってスカートが広がるのを楽しんだりしていた

「…おい、雪ノ下。これでいいのか」

「……………羽川さんはほうっておきましょう。それで、阿良々木くん」

「スルーかよ。てか、もう間違いとかじやなく言い切りやがったな」

「ええ、阿良々木くん。私の事は戦場ヶ原様と呼びなさい」

「……………え？その後の惨劇わかって乗らなさいけないのか」

「私はあのセリフを言いたいのよ」

「……………センジョーガハラサマー」

「片仮名の発言はいただけないわ。ちゃんと言いなさい」

「戦場ヶ原ちゃん」

雪ノ下雪乃改め戦場ヶ原雪乃のチヨキが、比企谷八幡改め阿良々木八幡の目をカスつて後方に消えた

「マジで失明するだろうが!!」

「失言するからよ」

「どんな等価交換だ!?!」

「銅四十グラム、亜鉛二十五グラム、ニッケル十五グラム、照れ隠し五グラムに悪意九十七キロで、私の暴言は練成されているわ」

「はあ、これで満足しただろ」

「いいえ、まだよ」

「まだ何かあるのかよ」

「今晚、一緒に星を見に行きましょう」

「わーったよ……おい、雪ノ下それは何の冗談だ」

「今の私は雪ノ下じゃないわ。あなたの恋人の、戦場ヶ原よ」

「……あゝわかったわかった、今晚だな。んで、由比ヶ浜はどうすんだよ」

「……二人で行くから意味があるんじゃない」

シャフ度でそう答えた

今夜、星を見に行こう？

比企谷八幡の放課後、猫まみれ

その日、比企谷八幡は珍しく部室に居なかった

部室には雪ノ下と由比ヶ浜がいつも通り思い思いに時間を潰していた。しかし、そこにはほぼいつも文句を言いながらもちやんと部室に来ている比企谷八幡の姿がいなかった。万が一にも億が一にも用事がある場合は由比ヶ浜に連絡するのだが、今日に限ってはそれすらなかった

「由比ヶ浜さん、比企谷君から何か聞いてないかしら」

「ううん、何も聞いてないよ。何か急いだようにすぐ教室を出ていったからもう来てい
ると思っただけだよ」

「……由比ヶ浜さん、彼に用事があると思う？」

「ん〜ヒツキーだし、普通に考えてないよね」

「そうよね。彼に用事なんてあるわけないわ」

「じゃあ、なんだろう？」

「……ちよつと探してくるわ」

「じゃあ、私も」

「由比ヶ浜さんはここにいてもらえるかしら。もし依頼人が来た時のために」

「うん、分かった」

雪ノ下は比企谷八幡を探しに部室を出ていった

探すと言つてもどこを探すべきか考え、由比ヶ浜がメールで連絡を入れた方が早かった事に気がついた。しかし、今更戻るわけもいかず思いつく場所をいくつか探すことにした。由比ヶ浜より先に教室を出たのだから教室には居ないだろうし、あと思いつくのは

雪ノ下はある場所に足を向けた

そこで、雪ノ下は衝撃の光景を目の当たりにした

時は昼休みに遡る

比企谷八幡の昼休みの過ごし方はいつも通りのベストプレイスで飯を食べていた。飯を食べ終え時間がくるまで涼んでいた

「ふう、最近は依頼者が来なくて平和なもんだ」

そう、独り言をつぶやきながら横で丸くなっているブチ猫を撫でていた

「お前はカマクラと違っておとなしく撫でられているな」

「な〜」

「ん、気持ちいいか」

時間を確認するため携帯を取り出し目線を猫から外しもう一度戻すと

「……あれ、さつきまで一匹だったよな」

猫が二匹になっていた。目をつぶって目頭をつまみもう一度目線を戻した

「……………えつと、1、2、3。また増えてやがる。まさか、目を離すと増えるのかよ」

比企谷が目を外すたびに猫が一匹ずつ増えていった。最初はブチ猫だけだったが白猫と三毛猫がいつの間にか増えていた

「お前らいつの間に来たんだよ。あ、この三毛猫オスか。珍しい」

「うな〜」

そう、三毛猫のオスはかなり珍しくどこぞの某SOS団に所属する平団員の押し付けられた飼い猫と同じ種類の猫である

「つたく、野良にしては人懐っこいな」

「な〜」

「にや〜」

「なう」

3匹を順々に撫でてまた目を離してしまった

「うにゃ〜」

「……もう、驚かないからな」

また一匹、アメリカンショートヘアが増えていた

「おい、こいつ、絶対野良じゃねえだろ。うかつにも驚いちまったじゃねえか」

さて、ここで問題だ。片側でここまで猫が増えているとなると、その反対側だったり後ろ側のように視線を向けていない方向はどうなっているのか

正解は

「うわ、なんだ」

四方八方からの弾丸と言う猫、いや猫と言う弾丸が降りかかった。あつと言う間に、比企谷はありとあらゆる猫を体にぶら下げていた

「重いー」

「くなく〜」

頭に乗っている黒猫（子猫）が鶴の一声ならぬ猫の一声を上げた

そして、無情にもチャイムが鳴り昼休みが終わった。比企谷はこのまま身動きが取れずサボる事になるだろう、と思っていたのだが素直にも猫達は比企谷から降りた。最後までおりなかった頭の子猫をおろし制服を払って教室に戻ろうとして立ち止った

「放課後また来てやるよ」

『【(へにゃ〜)】』

と、全ての猫が返事を返した

そして放課後に時間が戻る

比企谷八幡はずっとそこで待っていた猫達の相手をしていた。来た瞬間に猫たちがわらわらと寄ってきて座った途端、定位置と言わんばかりに体中にぶら下がった

やはり頭には子猫（黒猫）が鎮座した

「あ、やべ。由比ヶ浜に言つとくの忘れてたな。今から連絡を…携帯だせねえ」

そう、体中が猫まみれで連絡が取れなかった

「あくまあ、いいか。特に俺がいた方がいいって訳じゃないし。こうやって猫を撫でていた方が有益な時間の使い方だ」

「なくなく」

「はいはい、ほら撫でて欲しいところはどこだ」

1匹ずつ撫でて欲しそうな猫を撫でながらこの光景を写メって雪ノ下に送ったら悔しがるだろうなと思ったが、そもそも携帯を取り出せないし雪ノ下のアドレスも知らないの断念した

「ひ、比企谷君？」

そんな事を考えていたからなのか、後ろから雪ノ下の声が聞こえた

「ん、雪ノ下か。悪いなにも連絡入れずに」

「い、いえ、そんな事はいいのよ。それより、これはどういう状況なのか教えてもらいたいんだけど」

言葉自体はいつもの雪ノ下だが、口調は心底嬉しい物にであってそれを押しこめていくけどそれでも押し込めきれないほどの歓喜をおびていた

「見た通りだろ、猫まみれだ」

「これは、触っていいのかしら」

「おい、聞けよ。まあ、この状況じゃ無理か。雪ノ下こいつら撫でて欲しそうにしているから撫でてやれよ」

「にやー」

「あ、駄目だ。すでにトリップしてやがる」

雪ノ下はふらふらと近づき寄ってきた数匹の猫に意識を奪われ、そこに比企谷が居ることなんてすでに忘れていた。比企谷はそんな雪ノ下を動画に残そうと思ったがいまだ携帯を取り出せず、これまた断念せざるをえなかった

「な〜」

「にゃくにゃ?」

「にゃ」

「にゃ」

「にゃにゃ」

「にゃん」

「うな」

「にゃ」

猫と会話しているように見えた

「うにゃ」

「にゃん」

「うにゃにゃ」

「にゃくにゃん」

「にゃにゃにゃ」

「にゃん」

「うにゃにゃ」

すごく楽しそうな笑顔をしている雪ノ下の頭の上にも猫が乗っていた。子猫ではなかったが鈴をつけた小さな白猫で、なぜか分からないが『うたまる』と名付けたくなっ

た比企谷八幡であった

「おい、雪ノ下」

「にや〜」

「お〜い雪ノ下、戻ってこ〜い」

「うにや〜」

「にや〜」

「動画に撮ったぞ」ボソツ

「比企谷君、携帯を出しなさい」

「聞こえてんじやねえか！」

「いいから、出しなさい」

「嘘だよ、撮ってねえよ。つか、この状態じゃ携帯なんてだせねえよ」

「そう、ならいいわ……いえ、良くないわね。この事を誰かに話してもしたら」

「誰にも言わねえよ」

「そうね、言う友達がいなかったわね。ごめんなさい」

「謝るなよ、余計に悲しくなってくる」

「ところで、この猫達はどうしたのかしら？」

「知らねえよ。多分、外から入ってきたんだろ」

「ねえ比企谷君、こんな事前からあったの。あったのなら私に言わなかったのは何故かしら。」

「今日が初めてだよ。てか、なんでお前に言う必要があるんだよ」

「あら、部長に逆らう気？死刑だわ」

「おい、どこのSOS団だよ。って、なんでお前がハルヒを知ってたんだよ」

「えっと、ハルヒって誰のことかしら？」

「素かよ！そっちの方が怖えよ」

「比企谷君、もしこの先こう言う事があったのならすぐに私に言いなさい」

「百歩譲ってそれはいいが、お前のアドレス知らねえよ」

「なら、あとで教えるわ。それと、こう言う事以外で連絡しないでくれる」

「まだ何も送ってねえよ。あと、お前とメールのやり取りなんて想像もつかねえよ」

「にやー」

「くそ、言いたい事言って戻りやがった」

ぶつくさ言いながらも比企谷はそんな雪ノ下を見て、少し笑った

その後、由比ヶ浜が全然戻ってこない雪ノ下を探しに来るまで比企谷八幡と雪ノ下雪乃は猫と戯れていた

たまにこう言う時間が過ぎる事があるのは、また別の話

比企谷八幡の放課後、
猫まみれ
?